The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	老人保健施設ニューライフガラシアでのボランティア実習から
Author(s)	堀江, 剛
Citation	臨床哲学のメチエ. 1999, 3, p. 3-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5216
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集

医療研究グループ活動報告

ケアの現場に触れる

――老人保健施設ニューライフガラシアでのボランティア実習から――

昨年度、臨床哲学研究室では、毎週の授業の中でケアをめぐって多くの議論を行ってきた。看護や介護の現場で働く人たちとともに、「ケアとは何だろう」という問題を具体的なかたちで考えていく作業が、そこでねばり強く重ねられた。しかしまた、特別に現場を経験していない者にとって、この問題を考えることの難しさも分かってきた。こんな状況もあって、医療研究グループでは、ケアの現場を実際に見てみる必要があると感じられていた。

幸い、臨床哲学の授業に参加されている看護士の西川さんの協力で、私たち医療研究グループは、彼の勤める老人保健施設ニューライフガラシアにボランティアとして参加する機会にめぐまれた。老人保健施設とは、病院で治療を終えたお年寄りや、何らかの理由で家族の介護ができないお年寄りを、在宅復帰を目的として一時的に引き取るケア施設である。西川さんによれば、ニューライフガラシアは、地域やボランティアとの連携を通じた開かれたケアの在り方を模索しているという。私たちはこの理念に乗じるかたちで、単に見学することからさらに一歩踏み込んで、ケアの現場にじかに触れることができたのである。

単なる見学ではないので、差し当たって私たちはこれを「ボランティア実習」と名づけた。昨年10月と今年３月、それぞれ数名ずつがこのボランティアに参加した。しかし「実習」とはいっても、例えば看護実習のように、ケアすることを将来の目的として、現場にトレーニングしに行くのではない。むしろ、「ケアとは何だろう」「ケアの現場とはどのような所なのだろう」あるいは「私たちにケアができるのだろうか」といった漠然とした問いや不安を携えながら、とにかくその場をこの身で体験してみよう、というのが実習の主な目的であった。

ケアの現場に触れて、そこに多様な現実が含まれているのがよく分かった。ニューライフガラシアには70人近くのお年寄りが二つのフロアに分かれて入所しており、一つのフロアに数名のスタッフ（看護婦（士）と介護福祉士）が配置されているだけである。人手は極めて不足している。これは、これからの高齢化社会の現実を映し出しているとも考えられるだろう。地域社会やボランティアとの連携は、専門集団に限られない開かれたケアという理念であると同時に、今後ますます深刻になるであろう人手不足に対処するための現実的な手段なのである。

そこでボランティアも、ケアに関して一定の役割を担うことになる。つまり、配膳や食事介護の手伝い、あるいは様々な催し物（ゲームやカラオケ）に参加すること以上に、入所者の話をゆっくり聴くことがボランティアのするケアとして重要になってくる。スタッフは忙しい。お年寄りとゆっくり顔を合わせて語り合うことが何よりも大切であり、大きなケアになることは分かっているのだが、人手の足りない中で入所者全員のケアや緊急の介護を優先せざるをえない。仕事として現場に関わっていないボランティアが、これを補う役目にある。

また、地域に住むお年寄りや子供（主に幼稚園児）との交流は、入所者に対する社会的な刺激を創り出す。老人保健施設が外部と交流せず、その建物の中で閉じられてしまうと、どうしても収容所のようになってしまう。そこでケアされる者の活力も失われる。ケアは単に施設という閉じられた空間の中だけで語られるわけにはいかない、という現実がここにある。それはまた、施設を超えて、コミュニティーの問題に関係してくる。

さらに老人保健施設には、入所者の家族との連携という重要な仕事がある。お年寄りは、家族の中にある様々な理由から施設に入所し、また退所していく。施設の相談員は、それぞれの家族の事情とともに、施設経営のことを考慮しながらお年寄りの入所・退所を決定する。入所が長くなると、家族のほうで受け入れる余地がなくなり、結局お年寄り本人のケアにならない場合もありうる。ここにもまた、ケアが施設の中だけで済むというわけではない、という現実が見出される。相談員が家族とよく話し合って、施設と在宅でのケアをコーディネートするのである。

このように、ケアの現場には多様な社会的現実が含まれている。そしてその中核をなすのは、言うまでもなく看護婦（士）や介護福祉士の日々の仕事である。それは、まさしく身をもってお年寄りを看護・介護するケアの現場である。入所者の細かな健康管理、寝起きや食事、入浴の介助、おむつの取り替えなどなど、一つ一つが大変な作業である。私たちはこうしたケアの現場に、もちろん十分にではないにしても、一つの臨場感をもって接することができたと思っている。

ところでボランティアとして施設を訪れ

た限り、私たちにも入所者と個別に接する機会が多くあった。そこではすでに述べたように、お年寄りの話をゆっくり聴くということが大きな意味を持っている。これは、ケアの在り方を考える上で、非常に興味深いことであるように思える。通常、ケアはケアする者のされる者への積極的な援助であると考えられている。ところが、話にただひたすら耳を傾けるといった受動的な行為が、それだけでケアになることもある。もちろんならないこともある。このような場面で生じているケアとは何だろうか。

一回目の実習を終えてから、私たちは「傾聴ボランティア」というものがあることを知った。これは、東海大学健康科学部社会福祉学科の村田久行助教授が提唱・実践されている活動である。一般に「傾聴」は、カウンセリングなどの初期面接における技法の一つに位置づけられている。しかし村田さんの試みは、「傾聴」がそれ自体で一つの独立した援助になるという考えから、社会福祉におけるケア（特にスピリチュアル・ケア）の在り方を深めようとするものであった。私たちは村田さんの本や論文を読むとともに、本人を臨床哲学の授業に招いて「傾聴」に関してお話をしてもらった。

こうした経緯から、私たちは二回目の実習で、特に「傾聴」をテーマとして設定することにした。そして、実習の場で「傾聴」ができたと思った時にはそれを記録するようにして、後で検討できるような材料にしようと試みた。しかしこれは、私たちが「傾聴」というケアの技法を習得したり高めたりする目的で行ったのではない。そうであれば村田さんの開いている「傾聴ボランティア養成講座」にまず参加したであろう（実際、これに参加することも医療研究グループで提案されたが、時間的な余裕がなく断念した）。

むしろ私たちの関心は、そうした技法を身につけることよりも、そもそも「傾聴」がそれだけでケアになる（あるいはならない）のはどういうことなのか、それを具体的な事例とともに考えることであった。実習の場でやみくもに「傾聴」を行うのではなく、むしろお年寄りとの世間話の中から偶然生まれてくる（あるいは生まれてこない）ケアの在り方に触れることができればよい。そうした偶然性や危うさを含んだ「ケアの現場」に、私たちは焦点を当ててみたかった。そのことを通じて「ケアとは何だろう」ということを考えてみたかった。そして今も考え続けているのである。

以下の文章は、この実習に参加した者による感想や会話記録である。現場にほとんど初めて触れ、戸惑いを含みながらそこで考えられた「ケア」の問題を、読者が感じ取って下されば幸いである。最後に、林事務長を初めとする老人保健施設ニューライフガラシアのスタッフの方々に深く御礼を申し上げておきたい。彼らの積極的な協力があってこそ、私たちは「ケアの現場」に触れるという貴重な経験ができたのだから。　（ほりえつよし　博士後期課程）